

九月、十月に於ける視察

東京女子高等師範學校附屬幼稚園

一

九月から十月にかけて、幼稚園に於ける幼児の生活も中々多事になる。今まで残つてゐた暑が次第に涼風と變じ秋雨が降る日も少くなくなる、時には暴風雨になることがあるかも知れぬ。晝は次第に短くなつて夜が次第に長くなり秋分の日には晝夜平分となる、秋の彼岸の中日は秋季皇靈祭の日で、幼稚園は休日となる。今年の日曜と二日續となる。秋分の日にならぬ前に月見の夜がある。澄わたる空に満月が輝く下で月見の團子をいたゞくも幼児の樂の一、晝は次第に短くなり夜は次第に長くなる。秋の夜長に鳴く虫はこぼろぎか、太陽は次第に南を通るやうになつて大變に涼しくなる。九月にはどこでも秋のお祭がある。お神輿は幼児にも元氣がつく。十月に入るとやれ遠足やれ運動會で幼児の心も大變にいそがしくなり元氣も出る。僕が「一等だ」と威張りたくなくなるし、「赤が勝よ」と小さな心にも口惜しさが浮ぶ。その間に自然は刻々に變化して行き觀察すべき事物がいろ／＼に展開する、お月見にもお祭にもいろ／＼の觀察すべきことが多い。保育室できれ／＼にお話するのが觀察ではない。觀察はどこまでも幼児の觀

察幼兒の楽しい生活内容を豊富にし充實させる觀察であることを念頭に置くことが何時でも吾等供母が努むべきこと。

二

夏から秋にかけてだん／＼涼しくなること、これは寒暖計で測らせるといふのではない。毎日晝が短くなつて夜の長くなること、これも時計で測らせるのではない。日出や日没がだん／＼南にかたよることこれも磁針で測らせるのではなく杉の木とか何か目標となるものに比べての話、いろ／＼手近かな仕方では等に注意させることが九月十月の觀察の一。

雨が降れば、風が吹けば、共によい觀察事項。雨の種類だとか成因だとかまだ風の強さによる分類などは勿論説話するのではない。雨がどんな工合に降るか風がどんなに吹くか木の葉がどんなに動くか旗がどんなになるかなどを觀察させるのでこれも九月十月に於ける觀察の一。九月は一年中最も雨量が多いのが東京の話、それで折角の月見も流れとなることが多い。尤も月見は九月十月に限つた事ではないが暑からず、寒からず澄わたる夜の空が天空の觀察には便宜なところから自然月見は秋の行事只月見／＼で騒いだりいろ／＼のものを食べて腹をこはすが關の山でなく幼兒から月の形の變化星の位置などに注意をさせたきもの、三日月が一月に二回あると思ふ人、上弦の月と下弦の月とどんなに違ふか知らぬ大人よりも幼兒はよく觀察するものであるから勿論月について變な説明などはせぬがよい。只どんな

になるかを觀察させ若しいろく／＼と質問すれば幼兒が納得し得る程度の解説が肝要、それで月見も幼兒生活に於ける重要な觀察の一、しかし保育室で月見をさせぬやう、勿論夜の保育は禁物なれば晝の月見は出陣の相談、出來ぬ月見を堂々と保育室で「今日は月見の觀察をいたませう」と切口上で目的提示とやらをやらかす人がそこらにないとも限らぬからの老婆心。尤も月見の遊び仕方は結構。お團子はこしらへなくとも、すゝきをとりに行くもよければそのすゝきでみみづくをつくるもよい。また奮發して新粉でも團子をつくらせるならば一層面白い企、幼稚園のお團子は粘土細工と限つたものでなく、お新粉にて團子をつくらすべからずといふ施行規則もない筈。

三

秋は遠足、遠出はならぬ。幼兒が往復徒歩で疲勞を感じぬ範圍内で遠足の多い程結構。保育室でなくば保育は出來ぬといふ迷信あらば須らく打破するがよい。遊戯室でないから遊戯が出來ぬ。オルガン、ピアノがないから唱歌が出來ぬといふ文句は棚に上げて置くがよい。秋とんぼがスー／＼ととび、ばつたがはねる秋の草原、案山子にははれた雀がバツと飛下れる雑草の中で手の舞足の踏むところを知らぬ秋の幼稚園最良の保育、秋の青天井の下で自由にかける遊戯、バツタと共にはねるダンス、いろ／＼の草花が咲いて居れば尙更結構草花がなくとも雑草も、その實も悉く觀察の材料、遊びの道具も辨當持て敷莫塵の上でいろ／＼の草花でまゝごと遊がどんなに愉快で幼兒の生活を充實させることとせう。陰氣な保育

室に於ける保育と、それこそ雲泥の差でせう。或る時は花壇の傍に莫産敷いてお辨當を開くだけでも幼児には大遠足になる。稻刈る親達の附近に行つてお辨當を開くもよい。無理に電車に乗つたり自働車で行かねばならぬ遠足は幼稚園での遠足ではない。保育にならぬ遠足は面白くない。秋の柔い日光を浴びて新鮮な空気を思ふ存分吸つて子等は益々發育し發達すれば申分がない。その間にとんぼも觀察の材料となれば蜘蛛もいなどもばつたもけらもまた觀察の材料となる。燕は何時頃からなくなるか雀はどんなに穀物を荒すか一本脚の案山子は何をしてゐるか、案山子にとまる鳥は何してゐたか稻を運ぶ牛馬もバツタをねらふ猫も皆よい觀察の材料となる何を是非觀察させよとか何は觀察させてはならぬと幼稚園令にも施行規則にも一言半句も述べてない。只觀察の二字があるだけ。従つてどこでも幼児の感覺器官を刺激するものが觀察の材料となり幼児の興味を惹起するものが幼児の生活内容を充實すればよい。こほろぎをとることが興味があればそれをさせるがよい。花壇茶園の青虫をとるものがあれば尙結構とんぼをとつてもよい運動。とれなければとれないでよい。運動であり遊びである只とんぼの腹を切つて喜んでたりこほろぎを踏つぶして愉快を叫ぶ幼児の殘忍性破壊性を本能とはいへ適當に指導せねばならぬ興味に任せてどんなことでもと放任せよといふ精神ではならぬ。

とつたこほろぎは硝子鉢に砂を入れ金網か木綿布で蓋して飼はせるがよい胡瓜か西瓜の皮を入れて置けばよいがそれがなくなれば茄子を切つて二三片入れて置けばよい。ころ／＼と鳴き卵を産む鳴くのはどれ

で卵を産むのはどれか。また青虫甘藍や大根菜類の葉を食ふ精虫それを捕へて廣口瓶に入れ脱脂綿でもよしガーゼでもよい蓋して置き菜葉を少重づゝ入れて置くと次第に成長して蛹となる、蛹が來年春蝶となるそれが面白く觀察出来る。とんぼのちつながらそれを追かけ廻る幼児には早や性の芽生がある。この機會に性教育をなすとか「何です子供の僻になんて」いつて下らぬことを喋々したり、叱つたりするのは共に馬鹿な話、變に氣をまはしてやきもさせずとも幼児の觀察に任せいらぬ教訓や説話はしまつて置くべきもの。

四

秋の草花にも觀察させたきものが多い。すゝき、女郎花、朝顔、桔梗、しちにえぞさく、ダリヤにカンナ、ほうせんかにへちま、コスモスにけいとう等いろいろの草花が秋を飾るのであるからそこらに咲けるもの花壇にあるものを觀察の材料とせねばならぬ。是等は觀察の材料となり繪となり手技材料とせねばならぬ。幼児の生活の材料としていろいろに利用し玩具となして遊ばせねばならぬ。玩具もこしらへて飾つて置くのではなく眞の玩具で遊の材料とならねばならぬ。また秋の果實これもよい觀察。ざくらうにいちぢく、葡萄に梨、柿に栗、なすにいんげん、さといもにじゃがいも。いろ／＼の玩具にもなる。遊びともなり仕事にもなる。なすにいんげんの眼玉で豚が出來栗でくり／＼坊主も出來やう。いろ／＼と幼児に工夫させると却つて面白いものが出来る大人がこんなになんて押しつけるに及ばぬ。じゃ

がいも掘りも面白い仕事。花壇の手入も幼児に出来るだけですがよい。時には先生以上にうまいこともやるが先生のお手傳をしたといふことが下手でもこの上もない樂「邪魔になりますよ」、などとほねつけるのは宜しくなす。

五

秋の收穫の有様をよく觀察させることが肝心。都會の幼児には八百屋、市場の品物がどこから來るか知るだけでも大なる觀察。勿論話すのではない。ア、大根がこんなところにある。じゃがいもは土の中にある。といふことを實地に觀察することが大切、吾等の食物がどこからどうして出来るかを實地に研究することが重要な觀察事項。そして幼兒は蒐集本能が次第に顯著になる年頃、いも掘りも結構。なすもぎも面白い。出来るならば農園に於て何か採取させる工夫がありがたい。ちぎつてはならぬ。折つてはならぬと叱るだけでなく思ふ存分採取させることも一年に二度や三度はありたきもの、それには秋が一番。栗拾が出来るればよし、たけがりが出来るれば尙ほよい、これは十月に限つたことではない。十一月にも出来ることが多い。